

なりうること、そうして建てられた「自分の僧院」をヤンゴンで持つことが地方出身の比丘の一つのサクセスストーリーとなっていること、個人所有の僧院の所有権は他者に譲渡可能であることなどは、タイでは考えられない。そこで疑問なのであるが、このような世間一般とさほど変わらない僧院不動産の所有形態は、近代的土地（不動産）の所有・登記制度が整備された現代ミャンマーの大都市という特殊な状況下での事例であるのか、それともミャンマー・サンガの伝統として広く認められてきたものなのかが気になった。宗教空間としての僧院（寺院）の性格を検討する上で大変興味深い点である。

（村上忠良・大阪大学大学院言語文化研究科）

久保忠行『難民の人類学——タイ・ビルマ国境のカレンニー難民の移動と定住』清水弘文堂書房，2014，356p.

評者が知る限り、本書は日本語で書かれたものとしては初めてのタイ・ビルマ国境のカレンニー難民についてのエスノグラフィーである。

ビルマのカヤー州を出身とし、タイ北西部のメーホンソーン県に居住するカレンニー難民をとりまく複雑な状況について、長期にわたる現地調査をもとに記述し、考察を試みている。これまで国家による難民管理や国際的な支援の論理から語られてきた当該社会の難民問題について、著者の専門である人類学の立場から当事者の視点に迫っている。これまでアフリカ中心であった難民研究のなかで、タイ・ビルマ国境の難民問題の事例を提供するのみにとどまらず、本書はタイ、ビルマ地域研究においても今後参照されるべき研究となるだろう。

著者の久保忠行氏は、2004年4月から2008年7月までのあいだに、のべ26カ月にわたるタイでの現地調査、そのうち17カ月を難民キャンプのあるメーホンソーン県に滞在し、NGOの支援活動に同行するかたちで5カ所の難民キャンプで調査をおこなった。さらに2009年と2011年にタイにおける追加調査、2012年と2013年には米国およびビルマでの現地調査もおこない、難民キャンプをと

りまく状況だけでなく、その後の米国で第三国定住を選択した人びとや、民政移管後のビルマ帰還の可能性の検討についても視野に入れている。

本書は3部構成で全9章となっている。人類学の通過儀礼の分析概念をアナロジーとして、故郷を離れる移動の経験としての「分離」、難民キャンプでの生活という「過渡」、そして再び国家に包摂される「再統合」という三段階で、カレンニー難民の移動と定住のプロセスを示そうとしている。

「分離」のプロセスを描く「第一部 越境する難民」では、難民研究についての先行研究の整理と自らの視座を提示し（1章）、背景としての多民族国家ビルマとカレンニーをはじめとする少数民族との内戦の歴史的経緯、そして人びとの越境と難民キャンプ形成の歴史プロセスを描く（2章）。そして受け入れ国のタイにおける難民政策と難民キャンプの管理体制を詳述する（3章）。

「第二部 難民として生きる」では、「過渡」としての難民キャンプという生活世界を明らかにする。国家や支援機関の「ケアと管理」の視点ではとらえきれない難民キャンプの生活世界を、その居住空間や日常の営み、キャンプ内外の社会関係を描写することで可視化する（4章）。難民キャンプにおける伝統行事の復興を事例とするキャンプと故郷との連続性についての考察（5章）から、タイ、ビルマのいずれの国家にも属さないカレンニー難民の帰属意識の考察（6章）へと続く。

「再統合」のプロセスについての考察を試みる「第三部 国民国家のなかの難民」では、カレンニーを構成する民族集団のひとつであり「首長族」として知られるカヤンが、タイでの観光業をとおして定住化するプロセスにおけるカヤン女性のエージェンシーについての考察（7章）、難民キャンプから米国への第三国定住を選択した男性の事例による越境の民族誌の試み（8章）、そして最後にビルマの民政移管後の難民の帰還をめぐる状況についての考察で締めくくる（9章）。

ビルマ・タイ国境社会の研究に対する本書の功績として以下の3点を挙げたい。

第一に、タイ・ビルマ国境の難民キャンプ内部の日常を、参与観察によって可視化してみせた点である。その居住空間、季節労働者としての農園

での仕事、そのほか難民としてのさまざまな経験などのキャンプの日常を描写することで、難民キャンプが一時的な仮の居住空間ではなく、常態化した生活空間、ある種の「定住」であることを著者は指摘している（4章）。

第二に、カレンニー・ナショナリズムの生成の場としての難民キャンプについての分析（6章）である。難民キャンプは国家と国際的な支援による「ケアと管理」の空間であるだけでなく、少数民族にとってのアイデンティティ・ポリティクスの中場でもあることを本書で明らかにしている。カレンニーの民族主義政党である PNPP (Karen National Progressive Party) は、難民キャンプでの歴史教育や、カレンニー語とカレンニー文字の教育と普及に力を注いでいる。こうした活動が、難民にカレンニーへの帰属意識をある程度もたらすなかで、すべての難民がそのアイデンティティを受け入れるわけではなく、カレンニー・ナショナリズムとの一定の距離感があることも著者はとらえている。

第三に、難民のエージェンシーについてである。本書全体を通じて著者は、難民を単なる迫害を受けた少数民族としてではなく、むしろ難民という地位を積極的に利用し生きていこうとする人びととして捉え、その主体的行動に注目している。その最たる例が7章の「観光村」におけるカヤン女性に関する考察である。「人間動物園」と批判されることもある、真鍮のリングを首に巻く風習のあるカヤン女性の観光村について、カヤン女性自身の視点からみようとする。これにより、選択の余地なく見世物であることを強いられるカヤン女性という従来の見方ではなく、リングを外すという選択が基本的に女性自身に委ねられている状況を指摘した。このように難民であること、少数民族であることを利用し、ホスト社会で巧みに生きていこうとする人びとを描こうとしている。

本書では難民経験を「分離」「過渡」「再統合」という順序で構成している。この図式は、戦争、迫害、強制移住という暴力を始原とするカレンニーの移動のプロセス、難民キャンプにおいて第三国定住か本国帰還か定住の選択をせまられる人びとの現在を捉えるのに適している。ただし、こ

の分離、過渡、再統合という図式は、人びとの難民経験に「国家」という「起点」と「終点」があるという印象を与える難点がある。この図式そのものが、マルッキが言う「定住主義バイアス」[Malkki 1995] を前提としているという印象を与えてしまっている。

著者のカレンニーの難民経験の捉え方は、追われる経験、故地への思い、当事者である現実の難民の視点に、著者ができる限り寄り添った結果であろう。本書での著者の関心は、あくまでもいま生きている現在の人びとである。本書で扱われる難民経験は1980年代後半以降に起点がある。評者はいまだ非国家的空間に生きてきた人々の移動性というロマンに囚われているが、著者は現代世界に非国家空間は存在しないというリアリズムに立っているといえる。

しかし、難民キャンプという生活空間を「過渡」と表現することによって、その日常生活の観察から、それが一時的な滞在ではなくある種の定住だとする著者の重要な指摘を目立たなくしているのは残念だ。アイデンティティ・ポリティクスとカレンニー難民の関係を相対化する視点を本書は提供しているにもかかわらず、それでは彼らはどうあるべきなのかという著者の立場がはっきりとみえてこない。それをはっきりさせるためには、例えばトンチャイ・ウィニツチャクン[2003]が示したような、シャムと英領ビルマとのあいだで国境が画定されてゆく19世紀後半からの歴史のなかで、難民問題を捉える試みも必要ではないだろうか。移動性の高いことが常態であった当該社会の山地民が、定住を余儀なくされるプロセスのひとつとして、難民キャンプを位置付けるという視点である。

その試みは、久保氏も訳者のひとりとして参加したジェームズ・C・スコットの『ゾミア』の山地民論への応答にもなるだろう。スコットは東南アジア大陸部の5カ国（ビルマ、タイ、カンボジア、ラオス、ヴェトナム）と中国の4省（雲南、貴州、広西、四川）を含む広大な山岳地域を「ゾミア (Zomia)」という新しい地域概念と呼び、ゾミア・スタディーズ (Zomia Studies) という新たな地域研究のあり方を示した [スコット 2013]。

言語、民族的にも多様で、約1億人の少数民族が暮らす山地社会をひとつの「地域」として捉えることの意義は、国民国家単位で世界を理解する一般的な知のあり方だけでなく、米国の政策科学としてはじまった地域研究が暗黙の前提としてきた地域概念も見直す契機になっている。

スコットは「ゾミア」に生きる人々を「これまでの2000年のあいだ、奴隷、徴兵、強制労働、伝染病、戦争といった平地での国家建設事業に伴う抑圧から逃れてきた逃亡者、避難民、マールン共同体の人々」と定義し、その生業、社会組織、イデオロギー、そして口承文化さえも、国家から距離を置くために選ばれた戦略と主張した[同上書: ix-x]。これまで国民国家における少数民族として、貧困や人権侵害の被害者として、そして紛争から逃れてきた難民として理解されてきた山岳民族について、様々な背景を持つ人々から構成された、国家の支配から自由を求めて逃れてきた人々という新たな理解を提示している。

こうしたスコットのゾミア論と、ビルマ・タイ国境の難民問題を関連づけてみれば、当該地域の人びとの民族的アイデンティティよりも、その「生業のエートス」[松井 2011] に注目してみたい。松井はアフガニスタン東北部のパシュトゥーン遊牧民の長年の研究から、生業を生活物質の生産という限定的活動としてだけとらえるのではなく、生業自体が文化的な領分であることを示す「生業のエートス」という概念を提唱した[同上書]。タイ・ビルマ国境地域の物質的生態的条件から導かれる人びとの生業のあり方はいかなるものであったのか。スコットも同地域の焼畑耕作と栽培作物の選択について、移動性が容易な生業であるという観点から考察している。国家による統治、ビルマ軍の侵略と移動、難民キャンプでの定着によって失われた彼らの生活様式、知識とテクノロジーはいかなるものであったか。そしてタイ、ビルマ、そして第三国における定住が求められるなかで、彼らはどのような生活様式を再生するのか。

著者の当初の関心は、カヤンの観光村訪問からはじまり、難民キャンプの生活世界からはじまった。その後、難民キャンプを出て米国での定住を選択する人びと、また将来的なビルマへの帰還を

想定し、複数の国、地域におけるフィールドワークを継続している。こうしたカレンニー難民の現在をめぐるマルチ・サイトットなフィールドワークに、当該社会の地理・生態学的環境、生業と生活様式を視野に入れた、山地民の歴史と現在に関する研究者として、著者の今後に大いに期待したい。

(福武慎太郎・上智大学総合グローバル学部)

参考文献

- Malkki, Liisa H. 1995. Refugees and Exile: From "Refugee Studies" to the National Order of Things. *Annual Review of Anthropology* 24: 495-523.
- 松井 健. 2011. 『西南アジアの砂漠文化——生業のエートスから争乱の現在へ』京都: 人文書院.
- スコット, ジェームズ・C. 2013. 『ゾミア——脱国家の世界史』佐藤仁(監訳). 東京: みすず書房. (原著 Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press.)
- トンチャイ・ウィニッチャクン. 2003. 『地図がつくったタイ——国民国家誕生の歴史』石井米雄(訳). 東京: 明石書店. (原著 Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*. Honolulu: University of Hawai'i Press.)

富田江里子. 『フィリピンの小さな産院から』石風社, 2013, 288p.

フィールドワークのような読書体験

『フィリピンの小さな産院から』というシンプルで可愛いタイトルが付けられた本書には、フィリピンのお産をめぐる衝撃的な現実が綴られている。

助産師である著者は、家族で移り住んだフィリピン・サンバレス州・マンガハン再定住地に小さ